

保田春彦 《聚落を囲む壁 Ⅲ》 1994-95

タイトルにもあるように、この作品は人々が暮らす集落を取り囲む壁にも、密集する家並みにも見えると思います。保田が10年暮らしたフランスやイタリアの城壁に囲まれた集落から着想したのかもしれませんが。赤錆色は、集落の過ごした時の経過にも、そこで暮らす人々の温もりにも感じられます。静かな佇まいですが、今にも壁が動き出しそうな気配もあります。あなたはこの作品からどのようなイメージを持たれましたか？

ガイドスタッフ Y



鈴木昭男

《道草のすすめ - 「点 音（おとだて）」 and "nozo mi"》

2018-19

《点 音》は美術館内と敷地内に点在する 12 個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある 5 つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれませんが、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについ上ってみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点 音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12 の《点 音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

ガイドスタッフ Y



アルナルド・ポモドーロ

《太陽のジャイロスコープ》 1988

重さ5トンの球体は、中世の天球儀から着想を得て創られたという。私はこの作品を見て、2つに分裂した分厚い円盤の表面に刻まれた幾何学模様には、精密な都市空間を思い浮かべた。一方、そこに走る鋭い裂け目からは、マグマのように吹き出す社会の矛盾や人々の不安を連想した。

誕生から30年余り。その間、生々流転する日本社会をじっとみつめてきた巨大な球体は、この静かな部屋に佇んで何を考えているのだろう。



ガイドスタッフ M

川村清雄 《黄海大海戦》 1896 年以前

力強く波を切って進む旧日本海軍の軍艦松島を描いたのが、旗本から西洋画家になった異色の画家、川村清雄です。幕府が瓦解したのち1871年から10年間にわたり、米国やフランス、イタリアへ留学し西洋画を学びました。帰国後は、幼い頃に習った日本画の知識を活かし、西洋画と日本画の手法の融合に取り組み、独特の画風を確立しました。

川村は「遅筆」で有名でした。あるとき仕事を仲介した勝海舟は絵が完成しないことに怒り、彼に切腹を迫ったと言われています。



ガイドスタッフ F

チャールズ・ワーグマンとミスター・パンチ



第1部のトップバッター、五姓田義松が弱冠10歳で師事したのが、イギリス出身の報道画家、チャールズ・ワーグマンでした。

幕末の1861年に来日、翌年には風刺漫画誌『ジャパン・パンチ』を横浜で創刊しました。雑誌には彼の分身ともいえるべきキャラクター、「ミスター・パンチ」が登場します。その姿は腰に羽根ペンを差した武士の姿の西洋人。

ワーグマンはイギリス公使館が水戸浪士に襲撃された際に居合わせて、事件を本国に報道した人物ですから、「ペンで戦う」報道画家としての誇りを分身の姿を借りて表現したのかもしれませんがね。

石井林響 《童女の姿となりて》 1906

美しい女性が、優雅に舞っている姿が描かれています。でも実はこの人物は女性ではなく、女装したヤマトタケルの姿なのです。

西の国を支配していたクマソタケル兄弟を討つため、女装して宴に紛れ込み、油断した兄弟を見事討ち取ったという神話を基にした作品です。一見穏やかに見える画面ですが、足元に置かれた短刀が、その後の血なまぐさい場면을暗示しています。

林響はこうした歴史画や伝統的な画題を多く描いていますが、この作品を描いたときは、わずか21歳。豊かな才能が垣間見える作品です。



ガイドスタッフ O

村山槐多 《櫨》 1917

ガイドスタッフ N



昔、東京の上野公園にあったケヤキ。枝の先端は描かれていませんが、黒い線がぐっと上に向かい、高さを感じさせます。つややかなどっしりとした幹は存在感たっぷり、枝が折れ曲がるほどの強い風にも耐え、びくともしない。

鉛筆と木炭でこの大きな絵を描いたのは、少年時代から文学や絵の才能を発揮してきた村山槐多。スペイン風邪にかかり、惜しくも22歳で亡くなりました。制作中は「直立不動全力をつくしてといった形で、眼前の素晴らしい巨木を凝視しては描いていた」といいます。

この木が、まっすぐでひたむきな画家の姿にも見えてきませんか？

有島生馬 《蚊帳》 1917

蚊帳とは、寝る時部屋に吊り下げて寝床をおおい、蚊を防ぐものです。かつて多くの日本の家で夏に使われていました。このような日常の風景などを穏やかに描いた有島生馬ですが、次のどれが彼にあてはまるかわかりますか？ ① 兄は有島武郎・弟は里見淳という著名な小説家 ② 欧州留学から帰国後、雑誌「白樺」にてセザンヌを紹介 ③「二科会」の創設者の一人 ④日本ペンクラブ創設時副会長

答えはなんと、4つとも正解なのです。多彩な活躍に驚きますね。



ガイドスタッフ S

清水登之 《戦蹟》 1937

写実的な戦争画と異なりますが、攻撃され破壊された「戦蹟」が描かれています。作家の清水登之は 1907 年に単身渡米し働きながら絵を学び、カフェや労働者などを描いて評価を得ました。1924 年にフランスに渡り、キュビズムなどの影響を受け、1927 年に帰国。その後、従軍画家として中国などの戦線を訪れています。1 階の別の展示室に、1923 年に自身の妻子を描いた《親子像》が展示されていますので、この《戦蹟》との作風の違いを見比べてみてください。最愛の息子育夫が 1945 年戦死、絶筆《育夫像》を残して同年清水はこの世を去りました。



ガイドスタッフ 5

鹿子木孟郎 《大正 12 年 9 月 1 日》 n.d.

大正 12 年 9 月 1 日、関東大震災が起こりました。鹿子木孟郎は当時住んでいた京都から東京に入り、実際に見た被災地の様子を描いた《震災スケッチ》や、報道写真などを基にこの作品を描きました。堅実な画風のアカデミックな画家であった鹿子木のこのような行動の背景には、フランス留学中、歴史画家、ジャン＝ポール・ローランスの下で学んだことがあったと思われます。フランスでは伝統的に歴史画が最も格式の高い絵とされてきました。鹿子木は震災を聞き、日本の歴史の転換を予感し、それを描こうとしたのです。



ガイドスタッフ K

中原 實 《ヴィナスの誕生》 1924

アメリカ留学後、フランスに渡り陸軍歯科医を務め、欧州各国に滞在し7年ぶりに帰国したのが1923年、医学者として日本に新しい歯科医学を持ち帰った一方で、精力的に絵筆をふるい、作品を発表します。世界の文化経済の中心であった当時のヨーロッパで彼が見つめた発展する工業都市、そこに暮らす人々、人類が初めて経験した世界大戦とやがて訪れる世界大恐慌の狭間の時代に中原が求めたヴィナスとはどんな存在だったのでしょうか。

ガイドスタッフ O



新東京百景

関東大震災後、復興し始めた東京の姿を、8人の作家が共同で手掛けた版画集です。木版による柔らかな線と色彩によって、情緒豊かな東京の街並みが広がっています。「愛宕山放送局」は今のNHKの前身です。「東京駅口」は今でも面影がありますが、「東京府美術館」は、まったく違う建物に変わっています。現在と比べると、90年以上の時の流れが感じられます。

作品の中には蝶ネクタイにダブルのスーツを着て散歩する男性や、釣り鐘型の帽子をかぶった女性も描かれ、風景だけでなく、当時の流行を身に着けたモボ、モガの姿も見ることができます。



ガイドスタッフO

桂ゆき 《[切り株]》 1937

ガイドスタッフ Y



第1室からここまでの作品を御覧になって、女性作家の不在に気付かれた方、お待たせしました！桂ゆきは、女性が芸術を志す事がまだ困難だった戦前から戦中、そして戦後と一度も止まる事なく活動が続けた、日本における女性芸術家のパイオニア的存在です。

《[切り株]》は小さな作品ながら、当館の収蔵品の中で最も早い女性作家の作例という顔も持っています。桜の木の板に漆で描かれており、生キャラメルのような色合いは漆独特のもの。漆は樹液、樹の精です。それを切り株に戻してやるかのごとくに細密に描かれているのも面白いなあ、と思います。

薨光 《静物（雉）》 1941

ガイドスタッフ N



思わず緊張してしまうのです。どこかで見た十字架上のキリストの絵を思い出して。極端に縦長の画面。ぶら下がるキジの死骸と、生命力の強そうな緑濃い植物。複雑に交じり合う光と闇。

画面中央に描かれた実のような一對は、逆光で浮き上がり、赤と青のツルはまるで血管のよう。枝に見えたものは、ひょっとして鳥の脚？

戦時体制の強化で表現が厳しく統制される中、この絵を展覧会で展示するかどうか、仲間内で議論が起きたそうです。真珠湾攻撃の数か月前のことでした。当時の人々は、絵からいったい何を感じ取っていたのでしょうか。

北川民次（1894-1989）について

1914 年渡米。ニューヨークのアートスチューデント・リーグの夜学に通い、21 年にメキシコに渡りました。20 年代から 30 年代にメキシコで起きたリベラやシケイロスらによる壁画運動の根本的な考え方に触れた北川は、生涯、大衆のための絵を描きました。32 年現地の子どもたちに絵を教えるタスコ野外美術学校の校長となりました。36 年帰国。41 年日米開戦。展示作品は戦況が次第に厳しさを増し、作家も自由な表現が出来なくなり、また、画材不足の頃描かれました。北川のどの絵にも根底にはいつも人間に対する深い愛情がうかがえます。



杉全 直 《赤い蛇》 1948



体をくの字に曲げた、人とも機械ともつかぬ人物。腕のような枝の枯れ木に、半身が木のような裸婦など、鱗の光るうねりを中心に様々な人物が描かれているが、別々の空間にいるかのように彼らの視線は交差しない。無意識を追求する超現実主義の作家としてスタートした杉全だが、戦中戦後の「現実がはるかに超であるため」、50年代頃より抽象的な表現に移行した。一方、その根底に常にあったという、「自己矛盾を^な抛げだし、相反するものをぶつけ、同存させ戦わせる」という思いを、様々なイメージが併存するこの作品にも感じずにはいられない。

井上長三郎 《東京裁判》 1948

ここは終戦直後の東京・市ヶ谷の法廷。戦争の責任を問う裁判にかけられた指導者たちが、検事や弁護士が英語で話す言葉をヘッドホンで聞いています。作者の井上長三郎が、当時の記録映像を元に描いたものです。ぐったりと脱力した人、思わず顔を見合わせようとする人、あぐりと口を開け、うつろに正面を見る人。どこかマンガのようなコミカルさも感じますが、被告人達の筋張った手やくぼんだ頬からは、生々しさが感じられ、私には、時代に翻弄される人間の滑稽さや切なさ、画面からにじみ出ているように思えます。あなたにはどんな風に見えますか？



ガイドスタッフ T

鶴岡政男 《重い手》 1949

あなたはここに何が描かれているのだと思いますか？
戦時下の規制に反発しつつ貧しい中で絵を続け、東京大空襲で自宅や作品の大半を失いながら、戦後も活躍した鶴岡は、敗戦直後の上野駅周辺で寝泊まりする人々の姿をきっかけにこの作品を生み出しました。

圧倒的な存在感を持った何か。不思議な背後の構造物。
題名の《重い手》も気になります。見れば見るほど謎は深まるばかり。だからこそ、時代を超えて訴えかけてきます。コロナ禍に置かれた現在の状況に重ね合わせて見てしまうのは、私だけでしょうか。



ガイドスタッフ N

桂 ゆき 《抵抗》 1952

今回は2つの絵の見方をご案内します。まずはそのまま。赤いカニの爪の様なものに髪を引っ張られ、手は助けを求める様に鳥の脚にしがみついている人の顔が右下に。でも、その顔はどこか笑っているようにも見えます。次はくるっと時計回りに90度回転して見ます。左下にきた顔の表情はもっと追い詰められ叫んでいる様です。画面左上に描かれた新聞記事は1952年の破壊活動防止法成立の翌日のもので、これも桂ゆきの抵抗の1つの形でしょう。が、彼女が我々に仕掛けた自作の見方の可能性こそが、人間の固定観念に対する「抵抗」なのだと気付きます。





山口長男 《作品（かたち）》 1954

この作品はベニア板2枚を正方形にして描いてあります。少し離れて見てみましょう。私には水という漢字に見えますが、皆さんはいかがでしょうか？

作者の山口長男は 1902 年に現在の韓国で生まれました。19 歳で来日して東京美術学校を卒業後、3 年間渡仏します。戦前から抽象画を描いていましたが、1950 年代には黒地に赤茶、又は黄土色でシンプルな形を描いた作品を作りました。作者は赤茶は朝鮮、黄土色は中国の大地の色だと言っています。60 年代になると赤茶や黄土色の部分が広がり、やがて画面全体を覆い尽くすほどになっていきます。

白髪一雄 《作品》 c.1954

わわわっ、吸い込まれてしまいそう！ここは宇宙のブラックホール？いやいや、こびとになって人体を探検しているのかしら？

…なんて、眺めるほどに妄想、いや想像力をかきたてるこの作品。実はたった1色の絵の具で描かれています。作者の白髪一雄は、絵筆を使わず絵の具を直接指にとり、さまざまな塗り方をすることで、この独特の深みや躍動感に溢れた世界を作り上げました。

私には、無数の放射線やぐるぐる渦巻きのその先に、何だか明るい未来や希望が詰まっているようにも見えます。

みなさんは何を感じられますか？



ガイドスタッフ T

顰嘔 《田園》 1956

ガイドスタッフO



数え切れない程大ぜいの人々が元気に前進しています。戦争が終わって“自由”を味わえる期待感でイッパイ！オレンジ色が楽しく、エールが響きます。

輝く未来を夢見る希望にあふれた人々。画面の下には作者のメッセージが時代を映しだす…。

顰嘔は後に、様々なモチーフに虹色を重ねる作品を生み出し“虹のアーティスト”として知られるようになります。虹は人々を幸せにしますね。顰嘔の虹色の作品に出会ったらハッピーな気分になれるかもしれません。

工藤哲巳 《平面循環体に於ける融合反応》 1958-59

彩色した紐、木綿手袋、ビニールチューブに鉄…
これら日用品や廃材をつなぎ合わせた工藤の立体作品は、美術評論家の東野芳明により、これまで作品に使われてきたものとは異なる素材が用いられていたことから「反芸術」の作家と評されました。約 60 年前に捨てられていたかもしれない木綿手袋やビニールチューブなどが工藤の手により美術作品となって、こうして美術館に大切に展示、保管されていることは、地球温暖化やゴミ問題などの環境問題に直面している私達にとって、とても感慨深いですね。



ガイドスタッフ M

カール・アンドレ

《トウェンティ・セカンド・スティール・カーディナル》
1974

みなさんの足元に彫刻がありますよ。鉄板が2列に並んで全部で22個。彫刻というと、台座の上に乗っていて見上げたりする物のような気がしますが、この作品は床の上にそっと置いてあります。カール・アンドレはこの作品を作る少し前に鉄道会社で働いていて、どこまでも続く線路やたくさんの石炭が運ばれて行くのを見ていたのだそうです。

垂直方向ではなく水平な連なりを目指す彫刻です。このほかに、耐火レンガや枕木を並べた作品もあります。余談ですが、この部屋に展示されているフランク・ステラと仲がよく、スタジオを共用していたこともあるそうです。



ガイドスタッフ S



フランク・ステラ 《クォスランバ》 1964

メタリックな線と色が均一に塗られた画面。そして、その画面の形状は四角ではなく V 字の形が 3 つ並んでいる。ステラの極めてシンプルな表現、そしてカンヴァスは四角いという既成概念をも覆すような作品は 1960 年代、ニューヨークの美術界に強いインパクトを与えました。ステラはこんな言葉を残しています。「絵画は絵具ののった平面である。それ以上でもそれ以下でもない」。

カンヴァスは「四角いもの」という枠を超えて、自由に形をかえて表現しているステラの作品をみると、私はぐっと肩の力がほぐれるような感じがします。

ドナルド・ジャッド 《無題》 1973

私が最初にこの作品に出会ったときには、それぞれの箱の違いを一生懸命に探しましたが、実は 10 個の無機質な鉄の箱は同じもの。作家の指示に従い、それぞれの位置は箱の厚さと同じ間隔を空けて縦一列に、一番下の箱も床から同間隔の 23 cm と決まっています。作品と向き合う位置によって、床や、隙間から見える壁、写る薄い影、それに展示室の天井の高さも目に入ってきて、一緒に記憶に残ります。どこからどこまでが作品なんでしょうね。

ガイドスタッフ H



ロイ・リキテンスタイン 《ヘア・リボンの少女》 1965

「え、なあに？ただのマンガじゃないかって？あら私、アメリカでは有名なコミックに出てるの。原作よりもキレイって噂よ。それによく見て！このブロンド、赤と青のヘアリボン、目や唇、混じりつけ無しの三原色しか使ってないの。太くて黒い線でバッチリ輪郭取ってインパクトあるでしょ！私を見た人はみんなびっくりしてるわ。だって印刷の技法のドットを使って陰影や中間色まで表現してるし、今までこんな絵見た事なかったって！どう、少しは私を見る目、変わったかしら？」

さて、あなたなら彼女はなんと言っていると思いますか？



ガイドスタッフ T

ゲルハルト・リヒター 《エリザベート》 1965

この部屋に入ったときから、遠くに見えていたこの作品。写真かなと思いながら近づいてくると、ピンボケ？ 絵？ そう、これは油絵です。写真をわざわざ油絵にしました。なんで、そんなことを？ リヒターは「写真の中では見過ごされてしまうような何かを示すため」と言っています。リヒターは「絵」の可能性を求めて、写真をあえてぼかす手法で描きました。絵だからこそ伝えられることがあります。一枚の写真からたどる彼方の記憶。エリザベートの楽しい夏の日。水の感触、風のそよぎ。想像が広がります。あなたの思い出の一枚は？

ガイドスタッフ I



アンディ・ウォーホル 《6枚組の自画像》 1966

本人自身も注目を集める有名人だったウォーホルらしい決めポーズ。その写真をシルクスクリーンで転写した6パターンの自画像です。6枚の繰り返されたウォーホルはどこが同じでどこが違ってる？冷たい色と暖かい色。クールに見える？優しく見える？浮かび上がってくるように見える？消えていくように見える？

スロバキア系移民の家族に生まれてピッツバーグの工場地帯で病弱な子ども時代を過ごしたシャイなウォーホル、華やかなセレブに囲まれたニューヨークのアーティスト、教会で奉仕する敬虔なクリスチャン。ウォーホルはどんな自分が好きだったんだろう？あなたはどのウォーホルが一番好き？



デイヴィッド・ホックニー 《シーリアのイメージ》 1984-86

ホックニーは彼の親しい友人のシーリアを 60 年代から描いていました。この作品の中の彼女の顔は二つ、左側のひとつはこの部屋にある《赤いシーリア》と、もうひとつはフランスのヴォーグ誌 1985 年クリスマス号表紙の為に描いた作品と同じです。足が4本、床の線が交錯しているのも、よく見るとイメージを組み合わせ貼り付けています。

現実の世界とは写真のように固定した姿ではありません。複数の視点を自在に取り入れる時間経過や空間の動きを感じさせ、シーリアを生き生きと表そうとしました。彼は実験と探求を繰り返し新しい表現を試みたのです。



ジョージ・シーガル 《音楽を聴く女Ⅰ》 1965

なんで音楽が聞こえてくるのだろう、と思っていませんでしたか？中央に横たわるこの人が聴いているのです。オーディオの方へ身を寄せて、目を閉じて、体全体で音楽に没頭しているようです。屋根裏部屋のような、落ち着けそうなこの場所は、きっと自室の一角なのでしょう。まるで日常の一場面を、その空間ごとそのまま切り取ったかのようです。

シーガルは、漫画のヒロインでもなければ映画スターでもない、ごく普通の人々を作品にしました。この作品は、石膏を浸した包帯で人体から直接型を取るという、それまで誰も行わなかった方法で制作されています。



ガイドスタッフ K

アラン・マッカラム 《240 個の石膏の代用物》

1982-84

大きさ・形・色が少しずつ異なるたくさんの小さな
絵画のようなモノ。近寄ると、これらは実は石膏の
塊であることが解ります。私たちは、何故これを
「絵画」と感じるのでしょうか。皆さんは、このモノの
集まりに何を感じますか。リズムカルで心地良い？
真っ黒な画面が怖い？ 壁一面に絵画が展示された
大美術館の光景を連想する方もいるかもしれません。
題も画家も異なるはずの絵画というものが、ここ
ではどれも似たようなモノとして扱われているかの
ようです。私は「あなたは絵画をどのように見て
いるか」を問われているようにも感じました。

ガイドスタッフ S



エリック・フィッセル 《女の中で育ってⅠ》 1987

芝生の庭でキャッチボールをする少年と女性。作品名の《女の中で育ってⅠ》から思い浮かべるとこの女性は、お母さん？お姉さん？でも、なぜか裸！不自然さに違和感も抱くけど、好奇心も湧いてきます。また、少しずつして繋ぎ合わされたカンヴァスを眺めると物語の背景や起伏をコマを追うように辿ることもでき、人物の関係性などにも想像力が掻き立てられます。

作者のエリック・フィッセルは 80 年代から活躍する作家で、米国の郊外に暮らす中流層を題材に、複雑な家庭環境や社会で生きる人々の日常やプライバシーをも透かし見るように描き出しています。



ガイドスタッフ S

ジュリアン・シュナーベル 《森の王》 1984



なんだかゴチャゴチャしていますね。よく見ると沢山の皿にペイントされ、ブロンズ製の木片も貼り付けられて、粗くゴツゴツとしてかなり迫力があります。全体が見渡せる位置まで下がって見てみましょう。王冠をかぶり、剣を持った人物が画面中央に溶け込むように描かれています。このフロアで見てきた、鉄板を並べたものや金属箱の繰返し作品など表現要素をできるだけ削ぎ落とした作品とは対照的です。

1970年代、表現要素をもうこれ以上削ぎ落とせないところまで来たとき、画面に過剰にものを加えていくシュナーベルのこうした作品が現れました。あなたはどちらに心を揺さぶられますか。

蔡 國強 《Project for Extraterrestrials No.9—胎動Ⅱ》1991

画面の中、白い人のかたちに気づきましたか？ それを囲む円は和紙の上に置いた火薬の爆発でできた焦げ跡です。この作品は地球を舞台に、宇宙からもわかるほどの大規模なプロジェクトをおこなうためのプランとして発表されました。そしてそれは1992年ドイツで実現しました。白い人型はその時に作家自身が居る場所を示しています。炎に囲まれた作家の心臓のドキドキ、火薬の音とにおい、大地の揺れ… 想像してみましょう。

中国出身の蔡國強は自国の文化を強く意識し、火薬や花火、和紙、墨を作品に多く用い、また2008年北京五輪では視覚芸術監督も務めました。



ガイドスタッフ S

アンゼルス・キーファー 《イカルス—辺境の砂》1981

太陽に向かって飛翔し、翼を固めた蠟が融け、海に墜落したイカルス。ここは海でしょうか？炎の下には葦の原のような写真が貼られています。弧を描く砂をたどれば山にかかる暗雲から雨が降り注いでいますが、その先には光がさし水面がきらめいているようにみえます。「辺境」は、第二次世界大戦後、東ドイツ領となったブランデンブルク辺境領をさしています。敗戦の年に生まれた作家は、復興と東西ドイツ分断の中どのような景色を見、聞き、育ったのでしょうか。翼につながっているのはパレット。これは彼自身の肖像画なのかも知れません。



ガイドスタッフ K

宮島達男

《それは変化し続ける それはあらゆるものと関係を結ぶ
それは永遠に続く》 1998

展示室内にある椅子に座って、作品をゆっくり眺めてみてください。数字のカウンターの集合体であるこの作品、1つ1つのカウンターを目で追っていくと、共通のプロセスを踏みながらも、それぞれの動き方のスピードや表示の明るさに違いがあることがわかります。独立した個の集合体から全体が成っているようです。個人的な見解ですが、タイトルの「それ」を人として置き換えてみると、人同士が繋がりがあい、個性が活かされる社会、その社会は瞬間瞬間で変化しつつ、輝き続けるということが作品で表現されているように見えてきます。



ガイドスタッフ T

アンソニー・カロ 《シー・チェンジ》 1970

あ、きづいてくれました、この作品に。ありがとうございます。

木場公園の木々と呼応するかのような緑の物体。
色や形・大きさから、どんな印象をもたれました
でしょうか。

あらためて、キャプションをご覧くださいから
作品を見ると、素材から想像される重さや、タイトル
から浮かぶ情景に最初とは異なった印象を持たれ
る方もいらっしゃるかと思います。それもまた、
この作品の魅力のひとつなのです。



ガイドスタッフ A